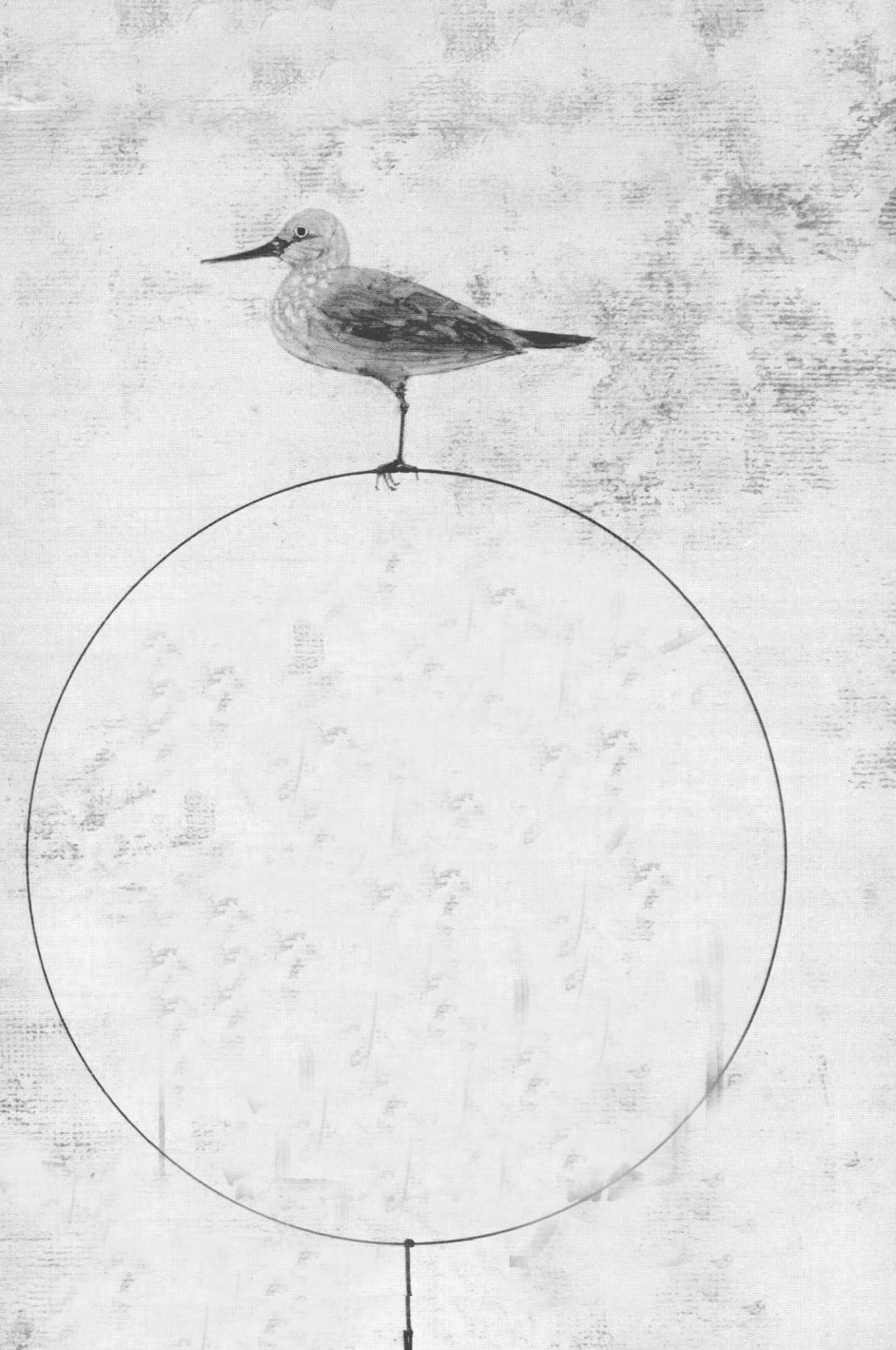
冬の真昼の静か

立松和平



冬の真昼の静か

昭和55年11月30日　初版発行
昭和56年2月10日　再版発行

著者　立松和平

発行者　角川春樹

発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号　102

電話（東京）(265)7111〈大代表〉　振替 東京3-195208

印刷・製本　大日本印刷

落丁・乱丁本はお取替えいたします

©Printed in Japan

0093-872292-0946(0)

目次

冬の真昼の静か……三
炎天……四七
タイガー・ヒル……一〇七
石の中……一三七
知らせの雪……一八三
初出誌一覧……二二五

装丁　沢田重隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冬の真昼の静か

噛んだ飯粒に小石が混じっていたためトイレに吐いて食卓に戻ると、母親に明日からもうこなくていいといわれた。歯の間に砂が残り、額から汗が噴いてくるのがわかった。いきなりいわれましても、とぼくは顔に笑をたやさないようにしたが、母親は立上がり頑なな背中をむけた。母親の一歩ごとにタンスの把手の金具が鳴り、ぼくの前に白い封筒がまっすぐ置かれた。俊雄が上体をゆらせぎこちなく正座し直した。ぼくは紙袋から参考書を二冊だして脇に置き、肩をすくめてみせた。食べかけの膳から離れ、玄関にかがまりバスケットシューズの紐を結びながら、ぼくは脇の下から俊雄に笑いかけてやった。高校生としての新学期を待っている俊雄は、母親に似た分別臭い表情で眉ひとつ動かさなかった。母親が参考書を返そうとしたが受けとらないできた。通りにでてからのぞくと、封筒には一か月分より一万円余分にはいっていた。

上京以来二年間家庭教師をしてきて、俊雄とは気が合い、高校受験に成功したばかりだった。先週合格祝いにビールをふるまわれていたぼくの頭から、生ぬるい血が一筋たれてきたのだ。借りてしばった新しいタオルも見る間に赤くふくらんだ。痛くはなかったがぼくは病院に無理矢理追いたてられた。ついていくとコートを着こんだ俊雄を母親はきつくたしなめ、ぼくの掌に千円札を押しつけた。ぼくは米軍王子基地へのデモを途中からぬけてきたのだった。幾度か機動隊とわたりあい、頭に警棒

を受けても気にもとめないでいた。デモ隊の勢いがまさり機動隊を基地に追い込んだところで、ぼくは離れた。午後七時のニュースではつぎつぎ金網を乗り越え突入しては倒される赤い旗が映しだされていたのだ。テレビの明かりに染まる母親の顔の線が硬張っていくのがわかった。血が額を伝ってきたのはその時だった。夜の街に開いている病院はなく、ぼくは薬局で赤チンと包帯を買った。下宿で鏡を見ながら手当てをした。いじると急に傷は疼きだした。二年間もつづいた定収入がなくなるのは困る。ぼくは数学と英語の高校一年生用参考書を求め、一週間かけて勉強し、包帯をとり傷を髪でおおってきたのだった。

思わぬ時間があまっても、このままぼくは下宿に帰る気にはなれなかった。警察は学生と見るとしらみつぶしにしつこく聞きこみにきた。駅前の不動産屋の紹介で借りた四畳半は、仲間のアジトではなくぼくの万年床があるきりだったが、管理人の婆さんは怖気づいてしまい、出ていくようにと顔をあわせるたびに声かけてきた。無差別な聞きこみなど言いがかりのようなものだった。別の下宿を探すのは面倒で、ぼくは居すわることに決めていた。

山手線は勤め帰りの人びとで静かに混みあっていた。網棚にあったスポーツ新聞を取って読み、降りる時にまた投げた。闘争の高揚期には吊り革にもぶらさがるなと囁かれた。指紋を採られるからだそうだ。思い出して馬鹿馬鹿しさのあまり頭をゆすりながら群につられて走り、駅前のバス待ちの列にとりついた。二台ほど満員のバスを見送ってからようやく乗れた。劇団の仲間の室岡の下宿にいくことにしたのだった。バリケードを追われて以来部屋に籠り、次期公演のための戯曲を書いているのだそうだ。バスは地下鉄工事のため走ってはすぐに止められた。ぼくと眼があうと、乗客たちはあわ

てて視線をそらすような気がした。強引に身じろぎしてみた。ぼくを押しつけていた肩や背中がわずかに遠ざかった。頭を横に振り髪をわきたててやった。自分の汗臭い甘酸っぱい体臭に苛立ちが噴きあげた。こうしている間も洋次は拘置所にいるのだ。保釈金のためのカンパ活動もうまくいっていなかった。降ろしてくれ、とぼくは出口にむかいながら怒鳴った。急いでんだよ。バス中の視線が一瞬集まってすぐに散った。窓の外は真暗だった。しばらく走ってからいきなりドアが開き、背中を突かれるようにしてぼくは跳び降りた。停留所の標識に工事用の点滅灯がにじみ、外套のボタンを首までとめた警官が孤独な交通整理をしていた。

室岡はまばらな髭を長くして部屋にいた。鉛筆をくわえ天井を向いて寝転がっていたが、いきなりドアを開けバイト首になったあと叫んだぼくを見て、はずみをつけて起き上がった。くりかえし叫んだぼくの前に、室岡は原稿用紙の束を置いた。いいとこにきたわ。原稿読んでくれねえか。こればっかり考えてんだろ、頭がおかしくなってよ。畳に髪や陰毛が紙埃を絡めて落ちていた。何だかみんなに会いたくなってな。きてくれて嬉しいよ。室岡は息がかかるほどに顔を寄せ、胡座をかいたぼくの膝頭に触った。山羊みたいな生温い獣のにおいだと思った。ぼくは端に手垢のついた原稿でまわりの毛を払った。ラーメンつくるけど食うかと、室岡は人差し指で髪をかきながらいった。うなずき、ぼくは細かい字で埋まった原稿束をめくっていく。電気ポットの湯が沸きたち、セーターが湿気っていくのがわかった。週刊誌を俎がわりに刻んだ玉ネギをポットにいれるのが見えた。題名は「衰弱待ち」だ。友達とふざけすぎて崖から落ちたはずの若者が眼をさますと、老人がいた。老人はつじつまのあわない身の上話をし、若者は刹那刹那の反応しかできず、頭にきたり丸めこまれたりしている。

岩の崩れる音とともに女が落ちてきた。失恋のため投身自殺をはかったのだ。若者はこの場所が崖の途中で陸からも海からも隔絶されているのを知る。ここで衰弱を待つしかないのだ。若者はいつしか老人とともに女を相手にからかい半分の無駄話をはじめる。学生食堂のマークのはいったプラスチック丼にラーメンが出来ていた。汁がはねとんだため袖でぬぐって原稿を閉じ顔をあげると、室岡はあわてて視線をはずし、ふたたび玉ネギを刻んだ。人間が書けてるかな、と室岡は眼に腕をあてたまま声をくぐらせた。ぼくは最後の汁をすすろうと口を開いた。室岡は顎髭の先をいじりながら用心深くぼくを見つめた。一言で彼は粉のように崩れ去ってしまうかと思われた。これでぼくらのことを書いているつもりか。あれだけの闘争を組んだのに、こんなものしか出来ないのか。丼の中の水面に写っている室岡の顔が汁とともにぼくの口に流れこんだ。洋次と会いたい気がした。一か月前に戻りたかった。ぼくらは闘いの中にいたのだった。

お父さん交通事故よおと婆さんに切迫した声でたたき起こされた。大怪我だって。パジャマのまま廊下を走り受話器にすがりつくと、お前大至急こい、劇団仲間の洋次の声が突き刺さった。バリケードが破られた。みんな結集している。ああっ、とぼくは眠気をかなぐり捨てた。すぐいく。電車を降り小走りに学校に近づくにしたがい身体の奥が細かく震えてきた。ボリュームいっぱいのスピーカーがアジ演説をひび割れさせていた。関西訛がぬけきらずどれほど激越なアジテーションでも何処かやさしい洋次の声が、息をつく間だけ苦しそうに跡切れた。野球バットと木刀で武装した運動部に寝込みを襲われたのだ。続ぞく集まってくる仲間を待ってキャンパスで集会中、機動隊が現れた。入試が迫って急に動きだした学校当局の攻撃だった。洋次の声がとんだ。行動隊は前へでろ。前だ、早く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヤッケを着た洋次の海老茶色の胸が浮きあがり、額に巻いてある包帯がまぶしかった。暗い口の中で鮮かな赤い舌が動いていた。はずむ肉に押されながらぼくは指のぬけた軍手で角材を握り直した。校舎の瓦屋根にふちどられた匂いたつばかりの青空が斜めにかしぎ、鳥が横切る。出口はとうにふさがれていた。そこの学生、すみやかに退去しなさい。頭上に鉄塔のように聳える指揮車のマイクが威圧する。昨夜までぼくらがいた窓にトレーニングシャツ姿の運動部の連中が見えた。逃げまどう女子学生の肩をかきわけ、ぼくは前列にむかった。香世と眼があった。輪郭の線が卵のように緊張していた。誰かの肩に乗っていた洋次はゆっくりと沈んでいった。ぼくの前には陽光の踊る広場があり、陽炎のむこう側に機動隊が揺れていた。濃紺のかたまりが一歩近づいた分だけ空気が密度を増した。ヘルメットを目深くかぶり直し、腰を落として身構えた。重苦しい靴の音とともに、急速に陽炎が濃くなっていく。ジュラルミン楯をならべて機動隊は包囲の輪を寄せ、ぼくらは中心にむかって縮んでいった。ふっと背後の緊張がゆるむ。角材を振りあげて跳びだしかけ、立止まった。肩越しに振りむくと、まるい背中の群が押しあいながら遠ざかっていった。間をおいて、ウワァーッと喊声がふくらむ。背後はすっかり崩れていたが、前方にぼくは上体を傾けていった。横に振られた金属楯をかろうじてよけ、勢いに敗けて重心をよろめかせた。腹を蹴上げられ、踵がコンクリートからはねた。もう一度蹴ろうと力をためた機動隊員の臑を角材で払ったものがいた。倒れた機動隊員を俊敏にとび越えていく洋次の海老茶色ヤッケの後姿が見え、すぐ人波に呑まれた。体勢を直したところを羽交締され、上着を脱ぎすてて逃がれると、後方にむかってぼくは走りだしたのだ。遠くに背中の群が見えた。機動隊が退路をあけたのがわかった。ぼくを包むあらゆる線がゆらぎ、倒れ、ぶつかりあう。爪先で石段を激し

く蹴りつける。ビニールの万国旗が音もなくはためく商店街まできて、ぼくは逃げすぎたことに気づいた。いつも餃子ライスを食べる中華料理屋の店員が自転車で出前にでかけるところで、アルミニウム箱を片手でさげた彼は、人なつこそうな合図を顎で送ってきた。知らぬ間に角材もヘルメットも投げていた。口笛を吹いて出発していく店員と背中をむけあい、駈けてきた道をおそるおそる戻ると、知った顔が幾つも路地からでてきた。ストリップのポスターが貼ってある電柱のところで、額に髪をはりつかせた香世がぼくの近づくのを待っていた。荒い息遣いが聞こえた。洋次は？　香世は瞳の奥をのぞきこむように顔を寄せ、ぼくの肘を強くつかんでいった。香世の瞳には空の青が染みていた。視線を香世の視線にからませるようにして、ぼくは顔を横に振った。室岡と千昭が立っていた。洋次を見ない？　香世は泣きださんばかりに狼狽して聞いてまわった。裏門のところではさかんに歩道の敷石がめくられ、アスファルトにたたきつけられていた。石の粉が風に吹かれ眼にはいった。万国旗が騒いだ。ストに突入する直前、野球に優勝して飾られたものだった。コンクリート塊を持てるだけ両手に持つ。さあもう一度いこうじゃないか。敷石のはがされたあとには湿った砂があった。桜の老木にはさまれた石段をおりていきながら軍手を脱いで尻ポケットにいれ、ぼくは、セメントに塗りこめられている小石の頭を指先でこすった。指の皮がわずかに痛み、石英の白濁した半透明の光があらわれた。やつらは正門前の広場に整列していた。危険を察したようにぱらぱらと雀の群が校舎の屋根を渡る。空のはるか高みには銀色の飛行機だ。飛行機や鳥からはぼくらはどんなふうに見えるだろうとふと思ってみた。参加しようとしないおびただしい学生たちが遠まきにし、ぼくらは少数派だった。親しいいくつもの顔が手錠につながれ前列にならばされていた。顔から血を流し、ジャンパーやズボ

ンは破れ、すっかりうなだれしゃがみこんでいた。海老茶色のヤッケが見えた。片眼がふさがっていたが、肩をそびやかし、石を投げろよと腕を差上げ合図してみせたのだ。手首と手錠で結ばれた機動隊員がそのたびに足払いをかけたが、洋次はひるまなかった。石は飛ばない。ぼくらは激しいシュプレヒコールで喉を焼き、コンクリート塊をポケットにいれたまま、行き場のないジグザグデモをくりかえした。

さっき弁護士から電話がきたけど、やっぱり起訴になったわよ。一分間でもおしいというように顔もあげずガリ版を切りながら、女子学生は早口にいって鼻から煙をだした。立看板やビラで見慣れた字体だ。みんな駅前でカンパに立ってるわ。右翼に襲われて反対に所持金盗られたりして、この頃思わしくないのよね。香世と千昭とぼくとはならんで四畳半にしゃがみ、ベニヤの机で仕事する上級生の活動家を見つめていた。街頭デモの渦中に、救急鞄をさげて機敏に走りまわる彼女の姿がいつもあった。学園を追われるなり救援対策本部は近くの寮に移されたが、この仕事も安全ではなく、無防備さが警察の目標になったりもした。彼女は山盛りの灰皿からやや長い吸殻をほじくりだしてくわえ、フィルターまで燃えかかった煙草の先をあてた。部屋にたちこめた煙で眼がしみた。獄中闘争やりぬいてるわよ、あの子。不当逮捕抗議のハンストしてるって。やだ、間違えた、そこの修正液とってちょうだい。原稿なんか書いてる隙ないからね、蠟原紙に直接書いてんのよ。外側に赤い液体がたれて固まった小壜を眼で確かめもせず受けとる彼女の指の股が、白い粉をふいていた。あんたたちにはそんなところでのんびりしててもらいたくないのよね。あの子の保釈金の十万円ぐらいノルマじゃない。

土方でも何でもしなさいよ。女の子にはスナック紹介するから。

裏門にぬける石段の両側には、幹に瘤のある桜の老木がいっぱいに花をふくらませ、風船のように今にも空にたち登っていきそうに見えた。風の具合で商店街にまで香りがとどいた。花びらの降りかかる石段には誰もいなかった。学園は警官の常駐するロックアウトがつづいていた。幾度も幾度も激論を闘わせたが、結局ぼくらは学内突入をしなかった。洋次や他の仲間の差入れのためスーパーマーケットで下着やタオルや蜜柑を万引きしては、救対本部にたくした。

千昭が駅のベンチで拾ってきたスポーツ新聞の三行広告には、グループ請負い歓迎と書いてあった。土方やスナック勤めなど心細く働くよりも、仲間でそろってできるのだ。念のため室岡の下宿に電話をいれると、われわれの未来のかかっている戯曲は完全に仕上げの段階にはいったから喜べとはずんだ声が返ってきた。わかってきたんだなあ。全部書き直してるからな。登場人物の顔が見えてきたんだわ。

広告どおりに停留所でバスを降りてからも、二度電話して場所を確かめねばならなかった。里芋を秤にのせビニール袋詰めの作業にかかっていた八百屋に大声で尋ねると、しゃがんだまま顎を横にしゃくられた。ドアの波ガラスに褪せたペンキ字をようやく認め、ノブをまわすといきなり階段だった。踏むと大袈裟に軋む階段の板は中央部がすり減って木目を浮きだし、砂粒を埋めこませていた。登りきるともうひとつドアがあり、部屋の奥で書類の堆積に埋もれた老人の背中が見えた。声をかけてからぼくらは扉を閉め、老人の仕事が一段落するのを待った。アイロンをあてすぎた背広の背中が光っていた。下からは八百屋の掛け声が聞こえはじめた。まばらだった声も重なりあい、熱をおびてくる

のがわかった。

何人？　老人の声に咄嗟に反応できずにいると、五人、香世が叫んだ。三人じゃないの。書類の間を近づきながら老人が瞳をわざとらしく左右にすべらせた。三人しか見えないけどね。仕事は五人でやりますと、ぼくは香世の腰を人差指で二度三度つついた。すこし指先がもぐり、小気味よくはね返された。そのへんの椅子にかけなさい。歩くごとに床板がへこみ、サンダル履きの老人の身体が前後に揺れた。出来高払いだからね。ぼくらはばらばらに頷いた。商品のアンケートをとってくるのが仕事だ。商品は罐詰やテレビ番組やプレハブ住宅などで、今回は軽自動車だった。二十ページはあるタイプ刷りアンケート用紙の束と、訪問先を記入したカードと、お礼に渡す赤黒ボールペン二本のセットとを紙袋につめてくれた。一日に一度は電話をいれることにして、期限は一週間。学生証をひかえさせてもらいたいと老人が掌をひろげたが、ぼくらは持ち歩かないことにしていた。どの学生も同じでやがると老人は舌打した。今度くる時忘れるなよ。

階段を降りるなりぼくらは近くのコーヒー店に駈けこんだ。勤め人らしい四人がシートに沈んで脚をひろげ、漫画を読んでいた。運ばれてきたコーヒーをいったん隣のテーブルに寄せ、五人分のうず高いアンケート用紙の堆積を三等分していると、ぼくは室岡の薄汚れた不精髭を思い浮かべてしまった。原稿読んだけどくだらねえな。「衰弱待ち」だってよ、あの野郎。ぼくは最初からぬるいコーヒーを受皿を持ってすすった。こぼさないでよね、と名簿のカードをめくりながら香世が眼の横に筋を浮かせた。カード一枚が二百円なんだから。千昭はぼろぼろの週刊誌を乱暴にめくってすぐ閉じ、声のない欠伸をした。あんな芝居なんかやる気にならねえやとぼくは指の節を鳴らす。「衰弱待ち」だ

ぜ。目標十万円よと香世はカップの底を見せて最後のコーヒーをのんだ。五万円はわたしが何とかするから、あんたたち二万五千円ずつはやってよ。

石川ねえ。煙草を横に通せるだけガラスの窓を開け、店番の婆さんは小さなコタツに丸まりこんだままいった。背中をあぶる電気ストーブの熱線がじーんと鳴っていた。石川何？　石川って人はいるんだねとぼくはガラスを息でくもらせた。百円玉を渡してしまうと、暖めた空気を逃がしたくないのか、婆さんはガラス窓に指をかけ閉めたがった。あんた、集金だろ、と婆さんはひび割れた唇をめくり勝ち誇ったような表情をつくった。糞婆(くそばば)あ。手を伸ばそうとしてぼくはガラスに突き指をし、握りこんだ。興信所だなと婆さんは顎を引いた。かまかけるならもっと上手にしな。あとでうらまれるんだから、うっかり教えられないね。

石川芳男のカードを最後にまわす。何としても十枚はやらねばならなかった。それでも二千円きりだ。歩くにしたがい商店は立て込んできた。遠くを見渡すと、旭牛乳販売店の看板が偶然眼につき嬉しくなった。床と壁がタイル張りの店の奥に冷蔵庫のステンレス扉があり、一歩ごとに紙袋を下げたぼくの影は潰(つぶ)れたりふくらんだりした。ぼくの姿は本のページをめくるように横ざまに跳びのき、扉の中からゴム長靴をはいた中年女がでてきた。いらっしゃいと女は妙に華やいだ声をだした。軽四輪トラックの使い心地はいかがでしょう。ぼくはアンケートを開いた。女は冷蔵庫に戻っていき、今父ちゃんいないもんで後できてくれない、と扉を内側から閉めた。ふたたび現れたぼくの姿は小さく揺れていた。旭牛乳販売店のカードを後にめくると、煙草屋で突き指したところが痛んだ。通りかかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com